

8 外国語・外来語の表記について

【問】 国語審議会では、外来語や外国地名の表記について、「ファ・フィ・フェ・フォ」を「ハ・ヒ・ヘ・ホ」，「ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォ」を「バ・ビ・ブ・ベ・ボ」と書くのを原則とし、「ティ・ディ」も「チ・ジ」とすると決定したそうですが、外来語の表記としては、「ファ・フィ・フェ・フォ」「ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォ」「ティ・ディ」を採るべきではないでしょうか。

【答】 報道の一部不正確から誤り伝えられている点があるので、国語審議会から学術用語分科審議会あての回答文を載せます。

1 外国語・外来語の表記について

- a) 外来語をかな書きにする場合、さしつかえないかぎり「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」・「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」の代りに、「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」・「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書く。

例 ホルマリン プラットホーム

バイオリン ビタミン

ベランダ ボルト

- b) 外来語をかな書きにする場合、さしつかえないかぎり、「テ

ィ」「ディ」の代りに、「チ」「ジ」と書く。

例 チンキ チーム

ラジオ ジレンマ

- c) 外来語および外国語の地名・人名をかな書きにする場合、原語のつづりにおける ia の a は原則として「ア」と書く。

例 ピアノ ダイアル

アジア イタリア

- d) 外来語および外国の地名・人名の表記の一般方針については、今後なお審議する予定である。

2 英語語尾の長音符号について

原語のつづりの終りの er, or, ar など をかな書きにする場合には、長音符号「ー」を用いる。ただし、省く慣用のあるものや、これから造る術語では、必ずしもつけなくてよい。

例 ライター エレベーター

ハンマ スリッパ ドア

エネルギー エントロピー

3 術語のなか書きと送りがなについて

- a) 特に術語であることを明らかにしたい場合には、かな書きの部分はかたかなにしてもよい。

例 早メ点火 サビ止ペイント

- b) 術語の送りがなは、難読・誤読を避けるに必要なかなを送る。

例 曲ゲモーメント 突合せ継手

伸び率 折り尺

(別紙参照)

(別紙)

国語審議会では、学術用語分科審議会から「学術用語の表記について」という問合せがあったので、術語部会においてこれの回答を作成することとした。術語部会は単独あるいは表記部会と合同で審議を進め、一応の成案を得たので、これを第17回総会に提出した。同総会ではこれを正式に決定し、今般回答する運びとなったのである。以下回答に補足して簡単な説明をしるす。

1 外国語・外来語の表記について

外国語・外来語の表記については、まず外国音をどの程度国語の音韻体系の中に認めるか(例「v」「ti」「di」…)ということと、どういうふうに呼称するか、あるいはどういう呼称をとるか(例ヴェニス—ベニス、ヴェネチア—ベネチア、インク—インキ)という二つの根本問題があり、これらが決定してはじめてどういうかなで書き表わすかということが問題になるのである。国語審議会としては、今後これらの問題を順次取り上げて、審議していく予定であるが、さしあたって部分的に決定した事項をa, b, c に示したのである。

- a) 外来語をかな書きにする場合、「ファッション」「フィクション」「ニュー・フェイス」「フォーム」などのごとく「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」と書く必要のあるものもあるが、さ

しつかえないかぎり、「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」の代りに、「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」と書きたい。ことに「フォ」は「ホルマリン」「プラットホーム」「ユニホーム」「マイクロホン」などのごとく、多くの場合「ホ」と書いてさしつかえないようである。

同様に「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」も、さしつかえないかぎり、「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書くことにしたいが、これらも、「オーバー」「テレビジョン」「カーブ」「ベランダ」「ボルト」のごとく、多くの場合「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書いてさしつかえないようである。

- b) 外来語をかな書きにする場合、「ティーパーティー」「ハンディキャップ」のごとく、「ティ」「ディ」と書く必要のあるものもあるが、さしつかえないかぎり、「ティ」「ディ」の代りに、「チ」「ジ」と書きたい。これらもまた、「チンキ」「チーム」「ラジオ」「ジレンマ」などのごとく、多くの場合、「チ」「ジ」と書いてさしつかえないようである。

なお「ヂ」は、外来語および外国の地名・人名のかな表記では、いっさい用いないことにしている。

- c) 「アジャ」「アジア」のごとく、原つづりにおける ia の a の表記には「ヤ」「ア」の両様が行われているが、これからは原則として「ア」と書くこととした。しかしながら 鉄道の「ダイヤ」のごときは、これを「ダイヤ」と書くことがないので、

これまでどおり「ヤ」と書いてさしつかえない。

2 英語語尾の長音符号について

英語などの語尾の er, or, ar をかな書きにする場合長音符号「ー」をつけることは、長年の慣習であるが、近ごろはこれを省こうとする主張もある。この長音符号をつけないことは、原音により近い表記であると思われるし、能率の点からいっても、一概に退けるべきものでないが、これは単に術語だけの問題でなく、すでに慣用の久しい外国の地名・人名や外来語などの発音表記に広範な変化をもたらすので、今にわかに贅意を表すわけにはいかない。原則としてはこれまでどおり長音符号をつけるのが適当であると考えるが、すでに「スリッパ」「ドア」「ハンマ」などのごとく長音符号をつけなくて行われているものや、これから造る術語では、しいてつけるに及ばないので、その含みをもたせてある。

なお、英語の語尾の gy, py やドイツ語の語尾の gie pie (そのほかにもある)も、er, or, ar の場合と同様に、長音符号「ー」をつけるものと考えて、「原語のつづりの終りの er, or, ar など」という表現をしておいた。(例エネルギー, エントロピー)

3 術語のかな書きと送りがなについて

- a) 国語の表記法として最も広く行われているのは、漢字かなまじり文であり、かなは普通にひらがなを用いている。かたかなは現在では主として外国の地名・人名や外来語や擬声語などを

書き表わす場合に限り用いられる。術語の表記についても、文部省著作の教科書ではおおむね以上の慣習に従っているが特に術語であることを明らかにしたい場合には、かな書きの部分にかたかなを用いてさしつかえない。

- b) 送りがなについては、文部省著作の教科書では比較的に多く送る方針を採り、公用文ではなるべく送らないことになっている。文部省刊行物の送りがなはこの両者の中間をいくものといえよう。このように送りがなが各方面でまちまちなのは決して望ましいことではないが、送りがなというものは書く場合と読む場合とでは立場が相反するものであるから、統一することがなかなか困難なのである。国語審議会としても今後の審議を予定しているが、さしあたって、術語の送りがなについては、難読・誤読を避けるに必要な程度のかなを送ることは妥当な処置であると考えられる。

「アジャ」か「アジア」か

【問】 今度、国語審議会では、「アジア」「イタリア」と書くことに決めたそうですが、「アジャ」「イタリヤ」と書くべきではないでしょうか。

【答】 Asia などの ia は外国語としては「ア」と発音されるのですが、わが国では生活語化するに従い「ヤ」と発音されがちであります。もっとも實際上、「アジア」という人もあり、「ア

「ジャ」という人もありますが、書き表わす場合は、「ア」と書くことにしたのであります。

それはちょうど「ばあい」「よりあい」が人により「ばあい」または「ばやい」「よりあい」または「よりやい」と発音されますが、書く場合は「ばあい」「よりあい」と書くし、ふりがなも必ず「あい」を用いているので、それと同じ関係であります。ただし汽車の「ダイヤ」のように「ダイア」と発音されることのない語は「ダイヤ」と書くことにしています。

9 中国地名・人名の書き方の表について

【問】 中国の地名・人名はどうして中国音でかな書きにしなければいけないのですか。

【答】 これについては、中国地名・人名の書き方の表が発表されたときの新聞発表を以下に掲げます。

当用漢字の普及に伴って、固有名詞の書き表わし方が大きな問題となっています。このうちで、わが国の地名・人名はしばらくおくとして、外国の地名・人名においては、すでに当用漢字表のまえがきの「使用上の注意事項」の中にも、

(ロ) 外国（中華民国を除く）の地名・人名は、かな書きにする。としるしてあります。

国語審議会では、かねてから中国の地名・人名の取扱について考慮し、漢字主査委員会において、朝日・毎日・読売・共同・放送協会5社の案である「^{かな}中国^{地名}一覽」を^{書き}人名^{一覽}を検討し、その結果を第15回総会に中間報告したのであります。同総会においては、

(一) 中国の地名・人名はかな書きにする。

(二) そのかな書きは中国の現代標準音に基く、という基本方針を決定し、さらに、具体案を審議するために、新しく外国（中国）の地名・人名の書き方に関する主査委員会を設けることになりました。

た。この委員会で、数回にわたって慎重に審議した結果、「中国地名・人名の書き方の表」を総会に提出して、これが正式に議決され、この書き方の普及に関して最善の努力をしできるかぎりすみやかに実施することを希望条件として文部大臣に建議したのであります。

中国の地名・人名に用いられる漢字の中には、当用漢字にはずれるものが相当に多くありますから、かな書きにすることは、一応、適当なことでありますが、かな書きにする場合、わが国の字音によらず、中国音でしるすということは、文字の問題をふみこえてことばの面に関係する重大な問題であります。しかしながら、漢字制限の立場からだけではなく、国際上の大勢から考えても今後必ずしも漢字をなかだちとしないで中国の地名・人名がはいってくるのが考えられますから、この際、字音によって書くよりは、中国音に基いて書くことを選んだほうがいっそう適切であるということになります。今日まで長い間、蔣介石と漢字で書いて〔シヨ一カイセキ〕と呼んでいたものを、チャン・チェシーと中国音によってかな書きにすることは、現在、漢字を比較的にたくさん知っている人にとっては、かえって不便でもあり、また困難なことでもありましようが、国語の将来を考えますと、やはりかくあるべきだと信ずるのであります。一般社会の理解と協力を願う次第であります。

10 送りがなについて

【問】 現行の文部省著作教科書の送りがなのつけ方は、国語調査委員会の「送仮名法」以来、せっかく整ってきた送りがなを混乱させるものではないでしょうか。

【答】 現行の文部省著作の教科書では児童にとって誤読 難読のおそれをできるだけ少なくするという教育上の心配りから 送りがなは多くつけるたてまえになっています。そのため たとえば 動詞についていえば、自動・他動の対応のあるもの、他の動詞または品詞と関係のあるものはそれらと区別をつくようにその語としての活用語尾を送るだけでなく、多く送りがなをつけるのであります。

(例、表わす、当たる、変わる、確かめる、など)

また形容詞では、誤読のおそれのあるものは、活用語尾の前の音節から送るものもあります(例、大きい、小さい、危うい、など)。複合動詞については上のにも、下のにも送り、またそれが名詞になっても送りがなを省かないのを原則とし(例、取り扱う、取り扱い、落ち着く、落ち着き、など)、送りがなを省いても読み誤りのおそれがなく、そのうえ送りがなを省く慣用が固定していると認められるものだけは省くことになっています(例、受持、取引、割合など)。

なお、総理庁・文部省編集の「公文用語の手びき」に送りがなのつけ方を示してありますが、これは国定教科書の送りがなとは多少違

っております。このほうでは、慣習や簡略な書き方をしたてまえから動詞は、当る、変るなどのように「た」「わ」を省きます。また、複合動詞が名詞になった場合には、誤読のおそれのないかぎり、送りがなの一部または全部を省くようになっていきます（例、打ち合わせる—打合せ、取り計らう—取計い、申し込む—申込、など）。当用漢字が定められたのに伴い、漢字まじり文にできるだけ一定した書き方のできることが望ましいと考えています。それには送りがなのつけ方は重要な問題であります。理論的にも実際的にも国民全体にとって、よりよいきまりが早くできたらと考え努力中です。

【問】 検定本の小学校国語教科書を見ましたが、国語の表記、ことに送りがながまちまちなのは驚きました。

【答】 動詞の送りがなは、明治以来、その活用語尾をもとに整理してきたので、「おきる」は「起きる」、「おこる」は「起る」と書くことになっていました。なぜならば、

お[○]き[○]る カ行上一段活用

お[○]こ[○]る ラ行四段活用

の違いがあるからです。ところが、こういう活用語尾による書き分けは昔のように文章の書き手が少数の選ばれた人であったときはともかく、今日またはこれからのように、すべての国民がみな文章を書かなければならない時代になりますと、右のように語尾の活用の違いを考えて書き分けることがむずかしくなります。そして「おきる」も「おこる」も同じように感じて、

そこに共通する語根の「お——」だけを漢字にして、その下の「一きる」「一こる」はどちらも送りがないにする、いわば一般的な書き方が自然に生れてきました。それでよいのだという考え方と、いや「起きる」「起る」でよいという考え方と、二つの流れが対立しているのが現状です。

ところで、文部省著作の国語教科書では、たとえば、「向く」「向かう」というふうに一般的な書き方を原則として採っているのですが 例外的に「起る」「聞える」「落す」などの数語が残っています。これらの例外をなくしてしまうか、あるいは逆に 例外のような書き方を本則にしてしまうかということは、今後の問題として取り上げられることになっています。

【問】 文部省編「総合当用漢字表」に、教科書と公用文とで送りがないの使い方が違っている例があげてありますが、なぜ統一しないのですか。わたしたちのクラスの討論会で問題になりました。

【答】 送りがないは、明治以来たびたび一定しようと試みられましたが 今日まで、まだすべての文章に通じて用いる一定のものができていません。今あるのは、それぞれの職域で取り決めたものです。したがって、公用文と教科書とでだいたい同じであるが、いくらか違ったものがあるのです。

公用文の送りがないは、明治以来の伝統を引いているので、その字の読みを示す上に必要で、じゅうぶんな程度で、なるべく少なく送るというたてまえでできています。それでたとえば、

「あたる」「あてる」は「当る」「当てる」としているわけです。

すなわち、

あ 当	{	らない	当	{	てない
		り			て
		る			てる
		れば			てれば
		ろう			てよう
（ラ行五段活用）		（タ行下一段活用）			

ところが、この「あたる」はラ行五段活用であるから「当る」でよい。「あてる」はタ行下一段活用であるから「当てる」と書く。というようなことは、動詞の活用語尾について学習したものでないとわからないことです。一般には、「あたる」も「あてる」も同じ活用系列の中に属しているというふうに考えがちです。そこで「あたる」も「あてる」も同じ「あ」の語幹であるように考えて、自然、「当たる」「当てる」と書く人が多くなりました。教科書では、その大勢によって、その送り方を採用したのですが、それでもまだその原則に徹底しないところがあります。たとえば、

聞く 落ちる 起きる

聞える 落す 起す

などです。それは まだそう書く人が世間に多いからです。

以上、送りがなには大きく二つの立て方があるということ

述べました。これで、お問合せに対する答は尽したと思います。さて、みなさんはどちらの立て方がよいと思いますか。

「当る」と「当てる」

【問】 教科書では「当たる」と書いて「当^あ」と読み、公用文では「当る」と書いて「当^{あて}」と読むのはどういうわけですか。

【答】 「当」の字は、元来「あたる」とも、「あてる」とも読める字（すなわちその意味がある字）です。それで、漢文では

一騎^{アケル}当^ニ千

といます。それを、日本語では適当にかなを送って読むのです。

漢文の知識の豊富であった明治時代には「当る」「当てる」と書き分けて、それでじゅうぶんに間に合っていたのですが、今日では漢文の知識が低下したので、それを問題にするようになり、従来のように

（ 当る
 当てる

と書くか、または新しく

（ 当たる
 当てる

と書くことにするか、どちらがよいかという問題になっている

わけです。

「次のとおり」

【問】 「次」は「つぐ」という動詞であるから、やはり「次ぎの」と「ぎ」を送らなければならないのではないのでしょうか。

【答】 「次ぎ」としてもまちがいではありませんが、「次に、次の」などでは慣用がほとんど固定していますから、現在、文部省の表記の基準では「次」の字だけにしています。

【問】 「とおり」は「通り」でしょうか。

【答】 これは「とおり」とかなで書くことにしています。それは「通り道」の意味の「通り」とは違った意味になっているからです。

「あたる・代わる・暮らす・積もる」など

【問】 「当る」がよいか「当たる」がよいか。そのほか――

1 2 3

当る――当たる――当てる

代る――代わる――代える

暮す――暮らす

積る――積もる

【答】 社会では多く〔1〕の書き方を採っていますし、教科書では〔2〕の書き方を採っています。どちらもまちがいではあり

ません。そして、この問題はまだ国語審議会でも取り上げていません。

「明かるい」と「明るい」

【問】 「明かるい」と「明るい」と、どちらが正しいですか。(小学5年生)

【答】 明治時代の本にはすべて「明るい」とありましたので、今でもその書き方が社会に残っていますが、現在の教科書では「明かるい」と書いています。どちらも正しい書き方ですが、皆さんは、学校で習っているとおりに書いてください。そして、おとなの人が「明るい」と書いているのを見ても、それはまちがいではなく、やはり「^あ明るい」と読むのだということを知っておいてください。

「言う」と「云う」

【問】 「ゆう」という字は、この「言う」という字と、この「云う」という字と、どちらが正しいですか。

【答】 どちらも正しいのですが、当用漢字表には「云」という字がありませんから、これからは「言う」とだけ書きます。そして、なるべく「いう」とかなで書くほうがよいと思います。新かなづかいでは、「ゆう」でなく、「いう」です。

11 左横書きについて

【問】 漢字制限・新かなづかいを実行したわれわれは、今一步進んで左縦書きを本体とし、左横書きを併用したらどうでしょうか。

【答】 昭和24年4月5日、内閣から政府部内一般に通達された「公用文の書き方」には「一定の猶予期間を定めてなるべく広い範囲にわたって左横書きとする」という一項が設けられています。これは従来の縦書きに比べて、横書きのほうが種々の点で実務上利点が多いと考えられた結果であります。

たとえば、書いた部分がすぐ見え、インキで手がよごれないとか、視野が広く、読みやすいとか、数式やローマ字をいれるのに便利だとか、欧文の書類といっしょにとじ入れるのにつづろがよいとか、右手でペンをもちながらページをめくるのに便利だとかいう点であります。

しかし、従来の伝統や習慣もあって、一挙にこれを改めるときにはかえって能率が一時低下することも考えられ、また縦書き用につくった資材にむだができることを恐れて「一定の猶予期間」を設けてこれを実行することになったのであります。文部省としてはこの通達の趣旨を尊重して、事務用書類には現在すでに左横書きを実行しています。ただ教科書には現在一般に行われている社会習慣を考慮して縦書きを用いているものもあ

りますが、一部のものには左横書きを用いています。左から書き始める縦書きは社会習慣として一般化されていないので、現在これについては考えてはいません。

【問】 文部省では横書きを奨励するつもりですか。

【答】 文部省では、昭和24年4月5日に内閣から通達された「公用文作成の基準について」の中の「書き方について」の第1項に基づいて、事務用書類の横書きを実行し、書式の統一が行われるよう努力しております。文部省としては、公用文の改善についての事務を主管している官庁ですから、当然政府の決定の線に沿って公用文の横書きを推進するよう努めております。ただし、一般民間の出版物や私的文書等については、別に考えていません。

【問】 横書きの長所についての所論は正しいでしょうか。

【答】 縦書きと横書きの長短については、内閣に設置された「公用文改善協議会」で相当の議論の末、書類は、なるべく広い範囲にわたって左横書きとするという決定に達したものです。そして、この協議会の報告が政府に採用され、各官庁に通達されたのです。

12 そ の 他

「ニホン」か「ニッポン」か

【問】 自分の国の呼称が「ニホン」「ニッポン」と両様あるのはおかしいと思います。国号の呼称は統一すべきではないでしょうか。

【答】 昭和2年の第52回帝国議会で国号「日本」の呼称統一に関する請願案が出て以来、しばしば議会でも問題になりましたが、昭和14年の第73回議会には議員提出の建議案となり、それに対して樋貝政府委員の答弁があり、いずれも公式の国家的決定はまだないということになっています。（当時の委員会議録または文部時報（昭和26年9月号・11月号 補注）所載の三宅武郎「国号『日本』の読み方について」を参照してください。）

文部省の教科書では明治以来、普通の文章には「にっぽん」とふりがなをつけ、唱歌などでは字あし（字数）の関係上、自由に「にほん」とも「にっぽん」とも使っています。そしてそのどちらをも正しい日本語とみて、そのうちの一つを誤りだと教えてきたことはありません。けっきょく問題は将来に残されているわけですが、たとえば、「山」の「さん」は音（漢語）で「やま」は訓（やまとことば）であるというのに準じて、「絵」

の「かい」は音で、「え」は訓、また「文字」の「もんじ」とか「日本」の「にっぽん」とかといえば音のことば（漢語）で、それを「もじ」とか「にほん」とかといえば訓読み的事のことばと考えて、そのどちらをも現代日本語の音訓二重制度の中での平等な存在として認めた上、さらに将来の日本語の動向をも見きわめた上で、慎重に考えるべきだと思います。

文語と口語との混用

【問】 現代文として文語体と口語体との混用はいけないと書いてある本がありますが、一流の翻訳家の訳本の中にしばしばこれを発見するのです。たとえば「知りそめし瞬間に愛したのです。あなたはいかに思われるや」とか「わたしと別れるときあなたは泣いた。」また「いみじ」「えもいわず」などの古語を口語中に平気で使っています。

それから「……です」「……します」のような一応ていねいに聞えることばと「……だ」「……である」を混用している文もたいへん多いようです。御説明ください。

【答】 文語と口語との混用は原則として避けるのが当然でしょう。ただし、たとえば「堂々たる態度」の「堂々たる」は現代の口語文における一種の連体詞として、また「断固として」などは副詞として認められ、「認めるべきだ」の「べき」なども口語文としては認めることになっています。例示の「いかに思われる

や」はもちろん「どう思われますか」が妥当な表現です。もっとも九州方言では今日でも「れる」を「るる」というふうに使っていますから、そうした方言の混在かとも考えられますが、それはそれとして、翻訳では現在の標準語法によるのが正しい態度でしょう。古風な言い方もなるべく避けたほうが翻訳をよくする最善の道なのですが、こういうことは一に翻訳者の自覚を待つほかはありません。しかもその自覚を促すことは読者の責任です。「です調」「だ調」などは文体の基礎ですから、それは一編の文章中に一貫するのが原則ですが、その上でときに意識的に格を破るということもあり得ます。また翻訳には翻訳の下請けということがあり、その下請けは必ずしも1冊の本をひとりの手でまとめるというものではなく、数人の手で分担することもあります。それで編により章によって文体や用字法が違っていることもありましよう。

部首について

【問】 字典の部首の創作者と年代・歴史などを教えてください。

【答】 「字典の部首」ということを広い意味に解釈してそれに答えようとするとう長くなりますから、ここでは狭い意味に、康熙字典や、普通の漢和字典における画引き字書の部首（214部あるもの）ということに解釈して、その創作者と時代などについて簡単にお答えします。

それは、明の梅膺祚の「字彙」が元祖です。

この字彙の部の214部の分け方が、それまでにあった説文(正しくは説文解字)や玉編などの分け方に比べて非常に便利であったので、その後は明の張自烈の正字通や 清の康熙字典 民国の辞源などに至るまで、すべてこの分け方によっています。日本の漢和辞典の分け方もそうであることは、御承知のとおりであります。

「疎」のヘン

【問】 「疎」のヘンは何と呼びますか。

【答】 ヒキヘンと呼びます。それは「疋」の字をヘンにしたものだからです。ちょうど「路」のヘンをアシヘン(足ヘン)と呼ぶのと同じです。

MEJ 4055

国語問題問答

定価 円 22.00

昭和二十八年七月一日印刷
昭和二十八年七月二十日発行

著作権所有 文 部 省

発行所 東京都千代田区神田小川町一丁目一番地
光風出版株式会社

代表者 竹田光二

印刷者 名古屋市昭和区白金町二丁目八番地
竹田印刷株式会社

代表者 福寿米吉

発行所 光風出版株式会社

東京 営業所	東京都千代田区神田小川町一丁目一 番地 電話番号 神田⑤三七七〇番
名古屋 営業所	名古屋市昭和区白金町二丁目八番地 電話代表番号 瑞穂⑧二五八六番 振替口座 名古屋三二五三番